

小学校開校

仁川に小学校ができたのは開港2年後の明治18年(1885)だった。甲申政変の影響で居留地の住民は約750人と伸び悩んでいたが、子供の教育は放っておかず、住民たちは東本願寺支院の僧侶に子女の教育を依頼したのだった。当時、東本願寺支院は領事館のすぐ東隣りにあった。学校は同年10月、1教室の寺子屋方式で開校、児童は10人前後だったという。

学童はその後徐々に増えたため居留民会は23年、公費で学校を運営することを決め、東本願寺支院西隣の土地と家屋を買収して僧侶のほかに専任教師も1人雇い入れた。25年2月になってようやく文部省令に基づく小学校となり専任の校長が赴任し、東本願寺支院から独立している。

生徒がさらに増えたため28年には2階建て約100㎡の校舎を増築したものの29年にはまた足りなくなって領事館内の病院の診療所を借りて授業している。

つぎはぎだらけの校舎ではなく本格的な学校をという居留民の要望は強くなり、31年11月、寺町(のち旭町)に約680㎡、平屋建ての校舎を新築して移転した。在校生は212人だった。寺町小学校と呼ばれるようになった。その新校舎もすぐに狭くなり、36年と38年にそれぞれ二階建て校舎を増築した。なにしろ36年の在校生は402人だったのに39年には910人、40年には1000人を超えるマンモス校になっているのである。

41年にはまた手狭になり山根町に分校をつくって6年生と高等科の生徒をそこに移した。この分校は44年まで続いた。ここはのちに仁川高等女学校になっている。

増築はその後も続いたが大正8年、仁川の二つ目の小学校である龍岡小学校が創設され、両校で生徒を折半することになって寺町小学校から1学年2学級ずつ、計600人余が龍岡に移っていった。このおかげで暫くは校舎問題はなかったが、やはり生徒が増えたためか昭和3年、煉瓦づくり2階建て延べ525㎡の校舎を新設している。昭和6年の記録では生徒数1175人とあり増え続けているのがわかる。昭和9年、開港50周年記念で寺町は旭町に町名が変わったため寺町小学校は旭小学校になった。さらに16年、旭国民学校と改称された。



筆者は20年旭国民学校に入学したが生徒は1200人から1300人いたと思う。校舎は鉄筋コンクリートの3階建てだった。

龍岡小学校は約12,500㎡の広い敷地に煉瓦づくり2階建て延べ1,438㎡の立派な校舎だった。創立時の生徒数は659人と記録されている。ところが不思議なことに龍岡の生徒数は終戦までほとんど増えていない。18年卒の青木貞雄さん(名古屋在住)の話では「松林町に住んでいたから学区は龍岡の方だったが、いつも龍岡の校門前を通り過ぎ、旭に通っていた」という。そのように越境通学する人がかなりあったと思われる。それが生徒数の差になっていたようだ。龍岡は分校という意識が住民の中に残っていたのかもしれない。

旭、龍岡は居留民が子弟のために作った学校であり、増え続ける韓国人の学校はなかなかできなかった。それに気づいたメソジスト教会は26年、永化普通学校を、30年には永化女子普通学校をそれぞれ建設して学校教育を始めている。博文普通学校は33年設立である。

写真は旭国民学校の校舎をそのまま使っていた頃の新興初等学校。第 56 回生(終戦時 6 年生)だった故・磯野守男氏が 2001 年撮影

平生飢三郎と仁川

明治 24 年 4 月から 1 人の日本人青年が仁川の海関(税関)で働き始めた。清国の袁世凱に支配されている海関を少しでも公平な役所にしようと林権助領事(のちの外相)は朝鮮政府に対して日本人を採用するよう要求、了承を得た。そこで林領事は東京高等商業学校(現一橋大学)の矢野二郎校長に優秀な卒業生 1 人を推薦してほしいと依頼、矢野校長が選んだ人物だった。名前は平生飢三郎(ひらおはちさぶろう)といった。

林領事は 3 月末到着した平生を面接した。「海関は外人ばかり。英語は大丈夫か」と質問したところ「学校で習っただけですから通用するかどうか私にも分かりません。ダメだったら、帰りの旅費は保証されていますから物見遊山して帰るだけです」と答えた。肝っ玉が据わっていると林領事も感心したという逸話が残っている。

平生は非常に優秀で、見習い期間 6 ヶ月の予定を 3 ヶ月で終了、正式に採用された。仕事はテキパキと処理、扱いは公平だった。日本人のなかにはそれを不満に思う人もいて「日本人なのだから、日本人には関税などで大目に見てくれ」という人がかなりあった。この人たちに対して平生は「私は朝鮮政府から給料を貰っている身です。もしあなたの商店で、店員が同郷の者ということで商品を特に安く売ったり、企業秘密を漏らしたりしたら、あなたはその店員を信用しますか」と問い返した。みんな黙ってしまった。

平生はある呉服屋の 2 階に下宿していた。あるときその呉服屋の女主人が大阪で絹織物を柳行李 5 個分仕入れ帰って来た。そうして税関を通さずにこっそり持ち出そうとしたのを平生の部下が見つかり、取り押さえた。周囲が見守るなか、平生は荷物の没収を命じた。夜、下宿に戻ると女主人がやってきた。なんとか荷物を取り戻そうとしているいろいろ弁解を始めた。平生は言った。「ここは海関ではありません。下宿代のことでしたら承りますが、荷物のことなら海関で言ってください」。税金をごまかそうとする家に下宿する訳にはいかないと平生はすぐに下宿を変えた。このことは仁川中に知れ渡り、平生は情実に左右されない厳正で私心のない男と評価されるようになった。

しかし海関の仕事は船が出入りする度に同じ単純作業をするだけで面白味がない。何か仁川にとって役に立つことはないか考えた平生は、貿易会社の若手を集め、英語を教え始めた。ときには簿記も指導したようである。

ところが 2 年経った 26 年 3 月、恩師である東京高等商業の矢野校長から手紙がきた。「兵庫県立神戸商業学校が内政紊乱で廃校の危機にある。県知事が奔走して 1 年以内に立て直すから待ってくれと議会で頼み、了承された。県知事は私に校長を誰か推薦してくれと言ってきている。わたしには君しか思い浮かばない。是非引き受けてくれ」という内容だった。

平生は英語塾をアメリカ人に引き継ぎ帰国、兵庫県立神戸商業学校校長に就任した。福沢諭吉も創設に関わった学校である。わずか 26 歳の校長に知事も県民も驚いたが、平生は 2 年で見事立て直したのである。平生はその後、経営が火の車になっていた東京海上火災に入社、再建した。同時に甲南高校、甲南大学を創立、学校経営にも乗り出した。その傍ら川崎造船の再建を手がけ、平沼騏一郎内閣の文部大臣を勤め、日本製鉄の社長、会長も歴任した。戦前の財界の第一人者と言われている。

平生が仁川で始めた英語塾は発展し、仁川商業、仁川高等商業学校へと育っていった。僅か 2 年の滞在だったが仁川に大きな足跡を残していたのである。

開港 10 年 街の様子

仁川が開港して 10 年が経ったころの様子を書き残してしてくれた人がいた。明治 25 年に発行された「仁川事情」

という小書籍が存在するのである。仁川府史の筆者(恐らく小谷益次郎氏)は「朝鮮で日本人が邦文で書き、印刷発行した最初の書籍ではないか」と推定している。著者は朝鮮新報の新聞記者、青山好恵である。当時 25、6 歳の青年だった。彼は仁川の中心街についてこう描写している。

「本町通りハ此レ実ニ仁川ノ銀座街ニシテ支那居留地ヨリ各国居留地ニ至ルノ間一直線ニ日本居留地ヲ横断シ其幅稍広クシテ平坦両側ニ樹木繁茂セシム。人家ハ悉ク商家ニシテ家屋ノ広壮多ク内地ノ都会ニ譲ラズ其開クルヤ釜山ニ遅ルル久シト雖モ市街ノ整清ナル家屋ノ美麗ナルニ至ツテハ其釜山に優ルコト数等ト言フベシ」

仁川府史の筆者は、この表現にそれほど誇張はないと言い切っている。仁川の居留民は長い船旅の末仁川にたどり着いた経験を持ち、途中釜山にも立ち寄っており、実情をよく知っていた。間違ったことは書けないはずだった。以下、他の資料も参考にしながら街の様子を再現してみる。

本町の最初の角が堀久太郎家であり、その隣に堀が経営する明治 22 年建設の「大仏ホテル」がある。3 階建てで朝鮮では最初の近代的ホテルであり、大変な賑わいだ。朝鮮政府との交渉のため欧米からやってくる人たちは、交通事情からどうしても仁川に少なくとも 1 泊しなくてはならないからである。宿泊代も 1 等で 1 泊 2 円 50 銭と高い。堀はこの利益を船舶業、不動産業につぎこみ成功を収めつつある。

堀家の筋向かいに、汽船や旅館に資材を卸す大草家があり、その隣が菓子店の本田屋である。「長崎カステラ」は漢城からも買いに来る仁川名物となっている。その隣に延田商店があり、ハイカラな雑貨店として有名である。

延田商店の向かいに第一銀行仁川支店がある。木造 2 階建ての洋館だが黒門をくぐって官庁式の小窓からお金を出し入れしなければならない。その隣は貿易商の慶田組である。大きくてモダンな建物が評判で朝鮮各地から見物客が押し寄せている。慶田利吉は 16 年組の 1 人である。

慶田組の隣に第 18 銀行と第 58 銀行の支店が軒を並べている。第 18 銀行の向かいは大阪に本店がある五百井長(五百井長兵衛商店)の支店で、第 58 銀行の斜め前は田中良助の邸宅である。田中家は酒・肥料の販売から回船問屋も兼ね、東本願寺の大檀那である。

そこから少し歩くとドイツ系商社の世昌洋行本社がある。ドイツ商品を輸入販売するだけでなく政府高官と結託して借款で高利を稼ぐ政商である。また各国居留地の土地をほとんど押さえ、借家を多く保有、土地も貸している。本町通りのその先はほとんど世昌洋行の借家だが藤山明治堂、徳本金物店など有名店も多い。

ざっとこういったところである。青山記者は 28 年、朝鮮新報主筆兼社主になったが翌年病死している。

川上操六中将の仁川訪問

甲申政変のあと比較的平穏だった李氏朝鮮は明治 26 年(1893)になって動乱の兆しが現れ始めていた。朝鮮政府は米不足になるのを懸念して米の大量輸出を禁止する防穀令を作っていたが、元山の日本居留民が違反して大量輸出、トラブルになっていた。全羅道や慶尚道では米不足や政府への不満から農民の反乱が相次いでいた。

そうしたなか、参謀次長の川上操六陸軍中将が密かに仁川を訪問したのである。川上中将は神戸から日本郵船の肥後丸に偽名で乗船、釜山や群山で農民運動の情報を集めた後、やってきた様子だった。隠密行動の筈だったが清国には筒抜けで、清国領事館から日本領事館に「何の目的で来られたのですか。表敬のためお目にかかりたいが、尋問に応じてもらえますか」とからかうような問い合わせがあった。日本領事館は「休暇で漢城や仁川、清国北部を漫遊旅行しているところで尋問には応じられない」と回答している。

川上操六は桂太郎、児玉源太郎と並んで明治陸軍の 3 羽烏といわれる軍人。薩摩出身で鳥羽伏見の戦い、戊申戦争、西南戦争で軍功があり明治 11 年陸軍中佐。15 年大佐となり近衛歩兵第一連隊長。17 年、大山巖陸軍卿に随行して欧米の兵制を視察した。帰国後陸軍少将に進み、20 年から 21 年までドイツに留学、モルトケらに兵学を学んだ。22 年参謀次長、23 年から中将になっていた。

仁川での川上中将は居留地、港湾施設などを注意深く見て回ったあと漢城に 10 日滞在、さらに仁川で 3 日過ご

して日本郵船の玄海丸で天津方面に向かった。今日の歴史書では清国と戦争になった場合の戦略を練った重要な旅だったとされている。

英国の地理学者で作家の イザベラ・バードは「朝鮮紀行」で感嘆を込めて書いている。

「変装した日本人将校がチベットとの国境にまでも足を運んで清国の強みと弱みを調べあげ、公称兵力と正味の兵力、ダミーの銃器、旧式で錆ぞこないのカロネード砲について報告していたのであるから、彼らは清国各地方からどれだけの兵士を戦場に動員できるか、いかにして彼らを教練し武装させるかを清国人以上に知っていた。兵站部など書類上でしか存在しないも同然の状態になりはてしている清国が戦闘を維持するのはおろか、まともな軍隊を戦場に送り込むことすら不可能であることも知っていた」

バード女史を驚嘆させたこれらの諜報活動のいくつかは、川上中將が旅行中に思いつき指示したに違いないのである。

川上中將は日清戦争中、陸軍上席参謀兼兵站總監、征清総督府参謀長として活躍、戦後台湾、仏領インドシナ、シベリア出張を経て 31 年参謀総長、陸軍大将に就任した。しかし 32 年、50 歳の若さで死去した。薩摩出身でありながら藩閥意識は全くなく、幅広く人材を登用して陸軍の近代化を進めた。シベリアを旅行したのは、次の敵はロシアという意識があったからだと思われ、もう少し長生きしていたら日露戦争の様相が変わっていたかもしれない。

甲午農民戦争と仁川

李氏朝鮮で甲午農民軍乱が起きたのは明治 27 年(1894)5 月である。かつては東学党の乱といわれていたが、乱に加わった人たちのうち東学の信奉者は少なかったこと、朝鮮政府が乱そのものを小さかったように見せかけるため単なる宗教的争乱のような名称にしたことなどがわかり、現在では甲午農民軍乱とか甲午農民戦争と呼ばれるようになっている。

乱は全羅道古阜郡の郡守が水税を横領したうえ重税を課したため発生し、瞬く間に全羅道全域に広がった。朝鮮政府の討伐軍約 800 人が 5 月 8 日、清国の軍艦平遠など 3 隻に分乗して群山に向かった。しかしたちまち敗れ、5 月末には道都全州が占領された。さらに忠清道、慶尚道にも波及し始めた。

仁川の日本領事館は、居留民のうち回船業の河永直吉、小川梅造、力武商店雇員の城島虎之助らを全羅道方面に派遣、密かに実情を調査させ、日本人への被害はないという報告を受けている。

領事館はその後、事変に乗じて清国が出兵する可能性があるという判断で清国軍艦の動静に注意を払っている。天津条約によって清国が出兵すれば日本も出兵することになるからである。清国軍艦の出入りは激しかった。鎮遠、平遠、楊威、超勇、操江、飛虎の 6 隻が仁川に来港、牙山にも濟遠、広丙の 2 隻が入港しているという情報は得たが、清国兵が乗っているかどうかは不明だった。

その後明らかになった外交資料によると朝鮮政府は 6 月 1 日、清国代表の袁世凱に対して派兵を要請、袁世凱も内諾した。この情報をキャッチした日本公使館はすぐに袁世凱に面会、確認して日本政府は 6 月 2 日派兵を決定している。

ところで現在の歴史教科書では、乱が起きた背景として朝鮮政府の腐敗のほか日本、清国などの進出への反発があったと書かれているケースが多い。けれども乱が発生して間もなく、日本の渡辺鉄郎という陸軍砲兵少佐が反乱軍の占領地域に単身潜入して乱の指導者である全琫準に面会、二日にわたって起居を共にし対談している。このなかで全琫準が強調したのは、国王へは忠誠を誓うこと、外国を排除するものでもないこと、政治の腐敗を招いているビン妃一族を除くことだけが目的である、という話だった。日本については改革推進の努力をしてくれていると高く評価していた。日本への批判はなかった。渡辺少佐は対談の後、日本政府に対し「漢人の中では珍しき男。わが政府の周旋でこれを登用すれば漢人は幸福になれる」と上申している。

時の日本の公使は、明治政府に反抗して函館五稜郭で戦い降伏した旧幕臣の大鳥圭介だった。大鳥公使は恐

らく自分の経歴を引き合いに出しながら、討伐よりも融和策を採るよう朝鮮政府に求めたと思われる。しかし朝鮮政府の討伐意志は強く、日本もこれに協力、日本の軍力で乱を鎮めた。戦後処理にあたって大鳥公使は、全琫準らを死刑にしないよう朝鮮政府に求めたものの、朝鮮政府は日本に通告することなく全琫準らを処刑し、乱に加わった者の資産を没収している。

日清戦争と仁川(上)

英国の地理学者で探検家、作家のイザベラ・バード(結婚後イザベラ・ビショップ)が漢江の調査を終え、元山から釜山経由で1年ぶりに仁川を再訪した明治27年(1884)6月21日の早朝、女史にとって刺激的な光景が広がっていた。港には日本の軍艦が6隻、清国とフランスの軍艦が各2隻、米国とロシアの軍艦が各1隻停泊しており、港湾施設はフル稼働していたのである。日本の軍用輸送船から兵士が蒸気ランチに乗って棧橋に接岸、続々と上陸していた。合間をぬってジャンクにつんだ兵站用の米その他物資が陸揚げされ、クーリーが海岸に積み上げていた。

バード女史が上陸してみると、日本人居留地大通りの両側の家々は兵隊の宿舎になって大混雑、その2階にはピカピカに光った銃が並べられていた。日本兵は宿舎が足りないので野営していると聞いて、彼女は大胆にもそこに調査に出かけた。のちに旭町になった場所である。1200人の兵士の野営地は中央に馬小屋と騎兵隊、山岳砲兵隊が陣取り、周囲に20人収容の円錐形のテントが整然と並んでいた。野営地は通りもきちんとしており、秩序だって小綺麗だった。テントの周囲には丁寧に排水溝が切られており、テントの中は筵が敷かれていた。ちょうど夕食どきで漆塗りの弁当箱が配られていたが、受け取る兵士たちは自分たちの任務を全うする気であるようだったという。

日本の出兵は農民の反乱から居留民の安全を守るということだが、6000人もの兵士は多すぎ、別の隠された目的があるのだろうと彼女は喝破している。

「朝鮮紀行」から長々と引用したが、彼女が調査した野営地は、能勢二等領事が林薫外務次官に宛てた報告によると日本公園と二号墓地周辺とあるから、仁川神社から旭町にかけての一带だったようである。ただ彼女が指摘した6000人の兵士というのは、その時点ではやや過大である。それまでに仁川入りしたのは、帰国していた大鳥圭介公使が6月9日に帰任する際引率した400人、12日に到着した混成旅団の一部1000人、15日到着の大鳥義昌少将麾下の混成旅団2000人、18日着の広島師団兵600人計4000人というのが正確な人数である。

イザベラ・バードは野営地を見たあと前年も泊まった中華街のホテルに行ったところ清国人はパニック状態になっていた。「清国と日本が戦争する。仁川が戦場になる」という噂が流れ、その日だけで清国人800人が仁川から船で逃げ出していた。袁世凱の母と妻も北京に帰っていった。

漢城では大鳥公使と袁世凱が外交戦を繰り広げていた。大鳥公使は清国に対し①日清共同で朝鮮の内政改革を進める②清国が拒否するなら日本単独で行う—という提案をする一方、朝鮮政府に対し、自主独立を侵害している清軍に撤退を求め、宗主関係を解除せよと要求した。清国は21日、朝鮮はもともと清国の属国であり拒否すると回答してきたのだった。21日はそのように大変な節目の日だったのである。